

## 詩同人誌評

### 第8回 新しい 出会いを求めて 中塚鞠子

同人誌を読む楽しみは、それぞれに特徴があることにある。年一回、年二回、季刊、隔月発行といろいろある。とりあえずすべての作品に目を通す。気になる作品、触発される作品、よくわからない作品、とシールを貼りながら読み進めるのは楽しい。初対面の人かな、と思ったり、馴染みの人に出合ったり。今回は特徴のある同人誌を紹介しながら、作品を見ていきたい。

「Rosa+Kerner」は6号なので比較的新しい詩誌のようで、若い人たちの集まりらしく、メンバーも、アーティスト、童話を書く人、朗読活動をする人と幅広い活動をされている。初々しくて新鮮な詩が並んでいる。

三日月ユキ「ゆびさし」

一歳半になる子ども  
短い白い指で次々とゆびさし

コエハ？ コエハ？

「これは？」って まだうまく言えなくて

目に映るものを かたっぱしから

コエハ？ コエハ？

……(略)……

あれは雲 これは窓

あれはスーパ― これはバス

……(略)……

「あれは銃 これは戦争

あれは敵 これは憎悪」

……(略)……

あれは天使 これは神様

子どもは笑顔

ただ答えてももらえないのが嬉しくて

若い時でないと書けない詩がある。片言が

喋れ出した頃の好奇心いっぱい赤ちゃんと

期待と不安に膨らむお母さんの姿が浮かぶ。

重村サヨミ「ホタルブクロ」

白いレースにボンネット

きゃしゃなうでがさげるには  
おきすぎるね

雨がそぼふるやみの夜

ホタルが宿をかりにきた

白いレースのボンネット

かんかんおひさまてつたなら

こげてしまふね

昼のほてりをあらいながして

六月の雨がすき

まいごのちようちよが

羽を休めにまいおりた

どうぞお入り

……(略)……

お話はどんどん出来上がる。ひらがなと漢

字をうまく使い分けているのか好印象。

西村尚美「田園風景の中に」

ある日は歌謡曲が

ある日はクラシックや唱歌が

高らかに出発して

朗らかに帰ってくる

八十超えた父がスマホを使い始め

You tubeから

好きな曲をポケットで鳴らして

散歩に出かけてゆく

……(略)……

そして庭先に

リストの「愛の夢」が帰ってきた

畑仕事で真っ黒の手

作業着の日焼けた田舎のおじいさん

お父さんを誇らしげに見つめる、温かい娘

さんの眼差しが感じられる詩である。

森木林「きょうは だれかのたんじょうび」

きょうはだれかのたんじょうび

きょうもだれかのたんじょうび

小惑星天体 リュウグウの

初の サンブル・リターン・デイ

その日 深海に

リュウグウノツカイの仔が 生まれた

細胞の ターン・オーバー

はらはらと さらさらと

おつかれさまです あなたのかげら

お初に お目もじ わたしのかげら

……(略)……

私も若いとき「わたしたちは星のかげら」

というプラネタリウムの脚本を書いたことを

思い出した。確かにリュウグウの砂の帰還は  
ワクワクでしたね。こんな詩を読むとほっと  
します。もつと皆さんの楽しい作品を取り上  
げたい気持ちで一杯です。

「月の村壺番地」が新しい人を迎えて賑やか  
になっていました。

小竹ゆい「帰る」(「月の村壺番地」13号)

長い道を走っている

トンボがぶつかりそうな近さで飛んでいる

……(略)……

帰らなくては

近道など考えず

この道をまっすぐ進めば

帰れるはず

海に落ちそうな断崖を通り

テトラポットの間を抜け

……(略)……

走る

そこが帰るべき場所なのかどうか

わからない

ただ

そこだけが信じられる場所だから

ただ  
走る

どこへ帰っているのだろうか。が、不安感  
はない。帰るために必死で走っているスピー  
ド感がよく出ている。信じられる場所とは。

遠野魔ほろ「静物 椅子の上の」

(「月の村壺番地」13号)

たとえば 起き上がりこぼし

手も足も引つ込めて しんとしている

誰かの手がそつと背中をおした

ゆらゆら いつまでも揺れて

迷子になった重心

を さがして薄暗がりのなかを降りていく

……(略)……

たとえば

誰かが通りすがりに

手の中のそれをふと置いた とでもいうよ  
うに

遠い日をあびてている一個の果実

静物になるまでの まどろみのプロセス

椅子から立ち上がる 時

それは椅子が告げる

それは椅子が告げる

椅子の上に置かれた、起き上がりこぼしや壺や果物たち。それらの静物が椅子から立ち上がる時は椅子が告げる、というのはどういう感覚なのだろう。遠野さんはまほろから魔ほろになってから、更に不思議が増した。

### 漆畑結音「ジャスミンとの授業」

ジャスミンが学校に来てからは  
気分がちよつと違う

普通はブルーマンデーなのに

……(略)……

彼女のニューヨーク訛りは柿色で

クラリネットの音色

彼女が喋ると

新学期のセントラルパークの風が颯颯

笑えばタイムズスクエアの

電光掲示板が一閃

……(略)……

ブルックリンから来たジャスミンのお陰で  
学校生活は毎日バラ色。夢にまで見る。学園  
天国の歌を思い出す。楽しい詩だけど、三行  
詩にした効果がありません。出てない気がする。  
ニューヨーク訛りが柿色で/クラリネット  
の音色という表現、素敵です。

詩誌「Les alizes」は214号を数えるだけであ  
って、さすがベテラン拙い。

### 中山直子「帰れない家」(「アリゼ」214号)

あの家が どこかこの辺りにあると  
この人は信じている  
そして 捜している  
少年時代をそこで過ごし

結婚してからもしばらく住んでいた家

……(略)……

ここも ここも 違う また違う

一緒に探し 探しながら

電車の二つ駅の間の高台まで来て

とうとう引き返した

家に帰りつくと「時間半たったいた

遠かった それなのに せっかく戻ってき

たのに

ここは自分の家ではないらしい

しきりに 泊まる 泊まる と話す

「住んでいいのよ」と言い直す

……(略)……

女性に多いと聞く、実家に帰りがたがる話。  
だが、この人は男性(夫さん)らしい。どち  
らにしても切ない話。そばに寄り添っている  
人のやりきれない切なさが伝わってくる。

### 宮地智子「雁が渡る」(「アリゼ」214号)

床どかのうえにひっくり返って

足をバタバタさせているので  
飛んで行つてのぞいてみると  
「おばあちゃんなんかあっち行け——」と  
わめきたてる

もっけの幸い とばかりに台所に立って  
キャベツの千切りにとりかかる

……(略)……

揚げ油がちょうどよい温度に上がった頃

むこうの方で呼ぶ声がある

「おばあちゃんでもない——」

火の元を離れるのは危険だからもうそっち  
へは行けないよ

……(略)……

ママが戻って来たら

おばあちゃんは日本へ帰るよ

新しいベビーシッターさんが来たら

おばあちゃんのことはずくに忘れることも  
わかつてるよ

ママが留守で寂しい気持ち、当たり前  
している孫と賢いおばあちゃんのクスツと笑  
える、ほほえましい攻防。さすがです。  
北川清仁「私のいとしい荒ぶる馬たち」

### (「アリゼ」214号)

私のいとらしい  
荒ぶる馬たちよ

おまえたちが現れたのは  
私の十三の年の  
秋のこと

霧のたちこめた稲穂の向こうからだった

それからおまえたちは

時には泉のほとりで草を食んでいたが

深々と広がる

私の荒野をいつも駆け抜けていた

……(略)……

手に負えぬ者よ

内なる力よ 言葉の霊よ

呪縛よ

私は間もなく外の世界に開いた柵を

閉じるだろう

……(略)……

荒ぶる馬は何を意味するか、読者はいろいろ想像してみる。この手に負えぬものほるときには優しく、うつくしい。作者はこの荒ぶるけものを抱えて生きてきたのであるが、間もなく外の世界に開いた柵を閉じるという。

田代久美子「ナカノノカラス」

(「アリエ」213号)

父は学徒出陣ののち 甲種合格で豊橋予備

士官学校へ行った

ある日命ぜられて某所へ 扉を開けた時か

ら試験が始まっていたという  
合格して 共同学校という名称の所へ集め  
られる

研究者 大学教授 などともいたが 何が目  
的だったかは分からずじまい

一ヶ月後 諜報機関 陸軍中野学校へ移動

「戸籍返上の誓詞」を書かされ……

……(略)……

昭和四十九年ルバンク島から帰還した小

野田寛郎は同期であったが

中野に一週間在籍しただけで ゲリラ戦を

専門とする静岡二俣分校に移った

……(略)……

終戦後も任務解除の命令がないまま、小野田さんは任務を続け 二十九年後任務解除命令を受け帰国したという。帰国時国から支払われたのは終戦時規定の一万数千円だった。故郷の和歌山へ帰る旅費にも事欠き、有志のカンパで賄われたという。

父の問わず語りの

埋火を掻き出し 息を吹きかけると 紅く

燃えあがる

それでももうすぐ 真白い灰になって 跡

形もなくなるのだろう

中野気象研究所の実態が中野学校であり、

長髪の体格の良い若者が黒マント姿で出入りしており「中野の鴉」と呼ばれていたという。学校の姿は跡形もなく消し去れ、名簿や書類は焼き去られていたと聞くが、小野田さん帰国を機に卒業生が三々五々集まり、名簿を作り同窓会をして、校歌を歌い、ただ涙を流したという。闇に包まれている貴重な父親の体。埋火を掻き出さねば書けない詩だ。

「木想」13号は二人誌。高橋富美子「骨にっいて」の連作は面白い。「骨の旅」喜六さん「春の夕陽」「今日は満月」「墓開きの日に」そのうち「骨を干す」はこんな感じ。

濡れているとやりにくいのですよ

紛骨してくれる住職がいうので

晴れた日を選んで

ポリ袋の中の骨を干す

ペランダに広げた三体の骨二十キログラム

かなりの量である

重ねた新聞紙がみるみる湿り気をおび

縁取りを描いてげんなりと変色する

……(略)……

日の光のもとありありと姿さらし

土に還ろうとする姿さらし

骨は

骨に過ぎないのだとひらきなおる

新幹線で立川から神戸に旅してきた、喜六さんとまつみさんと未っ子の正光さんの骨である。骨を干す、この非日常の情景を、感情を入れないで、さらっと書けるのが高橋さんの力だと思っ。

「潮流詩派」はもう273号。季刊誌だから68年以上前に創刊されている、総合詩誌として立派に引き継がれてきている。大変な苦労だと思っ。いったいどれだけの人たちがこの詩誌で育ち、この詩誌を手にしただろう。

山本聖子「うさぎうま」(「潮流詩派」273号)

ラ・マンチャの

少しかれたやつに乗っていた

やせこけた馬の名は

子どもでも ロシナンテ!

と 得意げに答えてくれるのだけれど

たまたま従者にされてしまい

太鼓腹ノサンチヨなどとよばれ

教養がないといわれた貧しい農夫の

乗っていたおとなしいロバの名などは

知る人が少ない

いちど唱えてみてほしい

その名 ルシオ を

そしてあなたは想いをさせてほしい

一人のいかれたやつと暴走の

巻き添えをくって倒れる

ちいさな命がある

そのなかのひとつの名として

覚えておいてほしい ルシオだ

……(略)……

うさぎうま ルシオ

ちよつと衝撃だった。私もルシオの名を覚えていなかった。ロシナンテもサンチヨパン

サも覚えていたが。いま、一人のいかれたやつ

の暴走で、どれだけの人が犠牲になっ

るかと思えば、その一人ひとりには名前があ

つて、数で述べられてはならないのだ。うさ

ぎうまと呼ばれたロバ、ルシオ。覚えておく。

宝田伸昭「男と女」(「潮流詩派」272号)

サーピス残業の剃刀は永遠に男どもの

髭を収束する

そっちへ行くともう行きどまりです

と

標識が一つ

二重とびはもうマスター

とっくに出来ています

女の子のゴムとびの中にキツネが

一匹まぎれています

日が暮れそうなのに物語の途中なのでやめ

られません

とうとう暗くなってきた

床屋の看板に明かりがともる

そっちにいくと

もう行きどまりです

この詩をどう読むか。それは読者の自由である。夕暮れ時、床屋では男の人が髭を剃ってもらっている。女の子が外でゴムとびをしている。お父さんを待っているのかもしれないし、近所の子かもしれない。「ALWAYS 三丁目の夕日」の世界を彷彿とさせる。

今回も沢山の同人誌お送りいただきました。ありがとうございます。全部は紹介できませんが、楽しみに読ませていただいています。

【受贈詩誌】

「アリエ3213号」・「異郷62号」・「石ノ森197号」・「イリヤ22号」・「K A I G A 122号」・

「潮流詩派272号」・「273号」・「交野ヶ原94号」・

「現代詩神戸280号」・「軸147号」・「どうるかまら33号」・「p o 188号」・「月の村老番地13

号」・「波蝕32号」・「飛脚37号」・「38号」・「木

想13号」・「梨翠書11号」・「12号」・「笛302号」・

「三重詩人261号」・「ぼとり69号」・「りんごの木63号」・「歴史615号」・「RosaとKernal 6号」・

「RIVER 186号」・「187号」・「188号」・「秋田県現代詩年鑑2023」・「ひょうご」現代詩集2022」